

『異邦人』における「語り」

— 動詞時制を中心に —

武本 智沙

アルペール・カミュの『異邦人』（一九四二年）は、物語るための時制である単純過去を用いずに、それには適さない複合過去を用いて書かれた小説である。本発表では、語り手である「私」（ムルソー）の語る行為と語られる対象との距離の変化を分析しながら、カミュがこの作品で複合過去を選択した理由を、「異邦人」の語りの矛盾や首尾一貫性の欠如と関連づけて考察を行なった。

冒頭の書き出しは、出し抜けに「きょう、ママが死んだ」で始まる。「今日」や「昨日」といった指呼詞は、その指示対象が実際に使用された場面との関係によってしか決定できないので、時の指標が設定されないまま物語は滑り出していくことになる。時間規定のための指標が明確でないため、語り手の「私」の視点をとって、言わば「私」の現在に寄り添っていくしかない。それゆえ、たった今電報を受け取り、それをすぐさま述べているかのようない印象を抱かせる。続く第二段落でも、「今のところママは死んでないみたい」に感じている「私」は、自分が語っていることと、母の訃報に接している「今」との距離はほぼ同時にしか表現できないのである。

養老院のあるマレンゴに出発する前の出来事を述べている第三段落では、出来事は生起順に語られず、出来事の時間は、交錯し

てゐる。『J'ai pris l'autobus à deux heures』(L'étranger, Gallimard, 1996, p. 10) は「2時にバスに乗った」のか「2時にバスに乗っている」のか。これは複合過去形の曖昧性（現在完了／過去）に起因する。ここでは「2時」という時間の表示があるので、その時点で完了している行為、つまり2時の時点でバスに乗っている状態にあることを、「私」の視点に立って捉えるべきなのであろう。要するに、語り手である「私」の意識を通してみると、2時の時点でバスに乗っていることになっているのである。このように『異邦人』においては、これから述べることを先取りしておいて、その時間性は後に明らかにされることが多い。

物語内の時間構成の指標は第四段落になってようやく定着したものになっていき、物語るという態度とともに出来事が生起順に述べられていく。第一部では、語っている時点は物語の筋とともに移行し、語られる内容との距離はほぼ同時か、筋にわずかに先立っている印象を受ける。一方、第二部では、時間の流れが速くなり、語られている事柄に対して距離が感じられる。それは一見、検事や弁護士が取調べ室や法廷でムルソーの不可解な一連の行為を首尾一貫したものにしようとする場面が続くので、客観的な筋の通った語りになっているのだと思われる。しかしながら、実はそこでは、自分のことが述べられているにもかかわらず、他人事のように眺めている語り手ムルソーの視点を通して語られているのである。

小説の最終章の五章では、ムルソーは刑務所員が死刑執行を言い渡してくる夜明けの時間帯に脅えて過ぐす。未来へとつながっているとかすかに感じていた時間である現在が、来たるべきものとは完全に断絶され、繰り返されるだけの循環した時間に過ぎな

くなつてしまふ。時間の流れが停滞し、ムルソーの「今」は、過去の形跡によつてしか意味づけられなくなるのである。「いつもこれから来るべきものに、例えば今日や明日に心を奪われ」、「今」の瞬間を生きてきたムルソーだが、もはや彼が重きを置いていない過去とのみつながる時間の中でしか存在しえない状況になる。物語内の時間性は、ムルソーの生活の変化と比例しており、時間の流れる速度もそれに対応している。

物語の展開を担う重要な出来事から、一見とりとめもないと思われる出来事の記述まで、まったく同じ調子で淡々と物語られるこの語りにおいて、矛盾や首尾一貫性の欠如がしばしば認められる。また、ところどころにテクストを切断する要素が挿入されたり、ちぐはぐな展開がみられる。そこには、物事を秩序立てようとか、論理的に述べようとかいった思惑はない。このような特徴を備えた語りに複合過去はどのように関与しているのだろうか。サルトルは『異邦人』の文体を「一つ一つの文が鳥のようである」と評したが、複合過去は出来事を分割、あるいは分離させて呈示する性質を備えていると考えられる。複合過去の本来の価値である完了アスペクトは、連続性を持った語りの流れをひとつずつ切り離して示すことになるので、複合過去の文が続くと、読み手は断片の連続が呈示されるような印象を受けることになるのである。『異邦人』では、行為の時間関係を表す副詞や接続詞が異常なほど多用されているのも、出来事を不連続にしか呈示できない特性を持つ複合過去を、語りの時制として用いることが不自然だからである。

複合過去がもたらす不連続性は、各々の文が表す出来事を因果関係の連続にすることを拒否する主人公ムルソーの生き方と重なる。

。法廷で、母の埋葬以後ムルソーがとつた行動が次々と明らかにされる。人を殺したという行為よりも、ムルソーの社会倫理や道徳から逸脱した言動が追求されて、それが彼を不利にした一番の要因となつた。異邦の人物として存在するムルソーが、自らの言動を意味ある統一体へとまとめあげられないのと同じように、この小説のそれぞれの文は孤立し、ただ出来事は並べられているだけなのである。

『異邦人』では、一個人にすぎないムルソーの意識によつてのみ捉えられた出来事や考えが思いつくままに語られる。そして読み手は、言わば、世界の意味付けを失つた主人公の心境を追体験していくのである。その行為は、絶対的な存在である語り手によつて導かれていく単純過去で作り上げられた物語世界を体験していくのとは異なる。異邦人ムルソーに語らせるためには、秩序だつた語りを構築する単純過去ではなく、ひとつひとつの出来事を孤立したものと呈示するような複合過去でなくてはならなかつたのだと考えられる。